

# 詩誌『詩学』の世界（3）

—60年代のはじまり

宮崎 真素美

本稿は、『詩学』創刊から昭和二〇年代（昭22・8～昭29・12）を考察した「詩誌『詩学』の世界—はじまりの10年」（愛知県立大学文字文化財研究所紀要）七号 令3・3）、それを継ぐ昭和三〇年代前半の五年間（昭30・1～昭34・12）を考察した「詩誌『詩学』の世界（2）—戦後10年からの展開」（愛知県立大学説林）70号 令4・3）に続く期間と内容とを対象とする。前者では、「1 近代詩史との接続 2 マチネ・ポエティク 3 同時代詩人評 4 詩学研究会 5 谷川俊太郎という存在 6 鮎川信夫の先見性」として、近代詩史、戦時下、同時代、後進、それぞれに対する接続の意識を指摘、後者では、「1 昭和三〇年の入り口 2 詩劇の流行 3 『死の灰詩集』論争 4 戦後一〇年と『詩壇の公器』 5 吉本の隆明と大岡信 6 「權」の解散 7 H氏賞事件」として、

戦後一〇年の節目を迎え、日本の戦後詩における重要トピックが、開花する詩人たちの存在感とともに次々にあらわれてくる展開期と見られることを指摘した。

今回は、これらに続く昭和三〇年代後半の五年間（昭35・1～昭39・12）を対象とする。前稿で対象とした同年代前半の勢いある展開を経たこの期には、現代詩の閉塞性や行き詰まりが表明されるようになり、それを開いてゆこうとするさまざまが試みられてゆく。そして、安保闘争を主とする政治の季節を背景にした、いわゆる「六〇年代詩」の始まりにもあたる。考察には、愛知県立大学所蔵の『詩学』を用いた。

## 1 「六〇年代」の幕開け

昭和三五年一月号（15巻1号）は、例年と同じく「現代日本詩集」として、詩壇の現況を映すべく各年代の詩人たち四二篇の作品の掲載から始められている。この期の世情を映す誌面として目を引くのは、「河井醉茗翁の寿賀を祝ぐ会」と、草野心平を代表とする「歷程」同人七一名による「安保改定反対声明」（「詩壇の動き」とが並んで掲載されている点である。『詩学』は折にふれて年長の詩人たちへの敬意を誌面であらわしてきた。例えば、昭和三〇年七月号（10巻8号）では「敬老精神」（「詩壇の動き」と銘打ち、これも同じく河井醉茗に対し、日賞発表記念講演会（当年の受賞は黒田三郎『ひとりの女に』で花束と記念品を贈呈したという「なかなかの美談」を取り上げ、新しさだけでなく、これまで活躍してきた老詩人に敬意を示すことが歴史の意味の再認識につながるのだとしている。このたびの記事は、七〇年にわたって現役詩人であり続けている「現詩界の最長老」河井の米寿を三年後に控え、国の芸術院会員としての報賞ばかりでなく、実作者たちによる敬意を表すべく、河井宅の庭に「詩碑」を建立するための寄付呼びか

けをおこなうもので、「日本詩人クラブ」「現代詩人会」「塔影詩会」と並んで「詩学社」もその発起人に名を連ねている。こうした記事の横に、述べたとおり、「歷程」同人による「安保改定反対声明」が並べられている。ただし、『詩学』の安保闘争関連記事は、ここで言えば「歷程」同人による声明の転載、また、同年一〇月号（15巻11号）の「樺美智子さん追悼詩集発行の訴え」（「詩壇の動き」）も「全京都学生・出版委員会」による文言の転載であり、誌面掲載で賛意の姿勢を示しているもののみずから発信してはいない。『詩学』の安保闘争に対するスタンスとして解することができる。

同じく「詩壇の動き」において取り上げられているのが「昭森社25周年記念会」。「百余人の詩・文壇・美術関係者」が集まり、それぞれが社主森谷均にまつわる「インネン語をひとくさり」、「余興」のひとつかたならぬ盛り上がりも伝えられ、詩人はじめとする作家たちにとっての昭森社、森谷がどれほど重要で親しい存在であるのかが認識される。出版社との良き関係を捉えた記事だが、後述のとおり、この一年後に同じく詩人たちに刺激を与えていた書肆ユリイカの伊達得夫が急逝、大きなショックを与えることになる。そしてさらにその翌年には、詩学社みずから詩書出版を始めるようになるのである。

この年一氣に注目を集めた一九才の詩人、藤森安和の登場に「詩壇時評」(無署名)も穏やかでない。先年末の『現代詩』(6巻12号 昭34・12)誌上で藤森の詩「十五才の異常者」の新人賞入選が発表されたのを受け、その詩篇批評とともに現代詩壇の分析に及んでいる。「いたずらに女の腿を切る痴漢のような詩」、「佳作にあげられている詩のなかにもエロチックな詩が多い」と評し、これらに何ら「異常な感覚」、「異常な想像力」は無く、「少しイカレていて、肉体だけが発達した少年たちの妄想に過ぎない」と裁断。続いて、「詩学」の作品に見られる平穏さと、「現代詩」の作品に見られる妄想癖とのあいだに、いまの日本の詩の弱点が見られると分析、「三十代以上」の詩人たちは「平穏無事に詩的フレームのなかで怠惰な日を送つて」おり、「十才代と見られる新人」たちは「カミナリ族のようにどこかへ身体をぶつつけたがつている」とし、これらをつなぐものは何もないと言う。そして、賛成四票、反対三票で入選させた選考委員の意見を、次のように捉えている。

関根弘は「自己批判の材料として」この作品を認め谷川俊太郎は「非常に強烈な問いみたいなもの」としてその存在に感にシヤツポを脱いでいるが、鮎川信夫は「存在感とい

うか、強い衝撃が来ないんですよ、ほかの詩は」というわけで、仕方なくこれを入選としている。ほかの委員、菅原克巳と木島始は全然これを認めないし、司会をやつた長谷川龍生は「じやしようがない。それが入選だ」と云つている始末である。

これまでの詩人が「魂のことがばかりに気をとられ」て「からだのことを忘れていた」とする関根の見方に対して、「からだ」のこと、セックスのことを書いているとは、ほんとうは云えないし、日本のビートニックと呼ぶにはあまりに貧弱、「詩における「カミナリ族」のようなもの、無法者のようなもの」と言い、「ビートニックの一面」や「アンチ・ポエムのようなもの」を持ちうるかも知れないが、「アングリー・ヤング・メンでないことはたしか」であり、「自己自身をふくめたなものにも怒つていない」と、当時の若者たちに対する形容を総動員して藤森の詩に対している。こうした「時評」を書かせた藤森は、後述のとおり、同年のうちに『詩学』誌上に登場することになる。

そして、嵯峨信之と木原孝一による「編集後記」は、ある転回点を迎えた感触をそれぞれに伝えている。嵯峨は、「戦後もすでに十五年目」、「深い感懐をこめてふりかえるのは三十五六

才以上の人たち」「それ以下の人々にとつては、戦争はもはや夢まぼろしのように単に記憶の周辺を通過するだけ」「廿才前後の人々には、戦争はちちははから聞いたとおい昔ばなしで、すでに時間の中にすら存在しなくなつたようです」と、戦後という時の感受の仕方に変化のあらわれていることを述べ、動き出したあらたな時について次のように続ける。

現代詩は戦争から帰つてきた者の血まみれの手で書かれた詩に始まり、戦後の飢餓と絶望の詩を経過して、昨年の後半あたりからようやく人間の根源的な性理を掘り下げようとする詩があらわれはじめたようです。ユリイカ、現代詩に選ばれた新人の性の合歡の歌は、まだ詩法を技術の確立もない未熟なものでしたが、ともあれ人類の未来に展ろがろうとする本能から発せられた声であることは、まちがいのないじじつです。「未来は始まつた」のです。

また、木原は、「最近、本誌の詩が無気力だ、と何人かの人に云われた。この一年が、ほとんどの詩人にとつて混乱の一年だつたから、そうした影が感じられるのかも知れない。」として、前年四月に端を発し年末まで尾を引いた「日氏賞事件」による動揺をほのめかしている。そして残念ながらこの禍根は深く、一年後に再燃することになるのである。

同年二月号（15巻3号）の座談会「1960年代の詩を探る」（吉野弘・清岡卓行・岩田宏・飯島耕一・鮎川信夫）冒頭でも、鮎川信夫が、「今年（筆者注・前年の昭和三四年）は日賞事件が半分くらい占めちやつた」、「そんなことだけでわいわいいつてたから」「始ど何にもない年だね」と切り出しているように、日氏賞事件によって多くが翻弄され、停滞した年であつたことが、前掲の木原による述懐と同様に伝わってくる。「現代詩人会」は幹事の総辞職、新幹事による立て直しの挨拶状を同年末に公にし収束をはかつたのだったが、事はそう簡単に運ばなかつたようである。鮎川らの座談会掲載と同月の『詩学年鑑』（15巻2号 昭35・2）では、「クロニクル1960」において同事務も年表のなかの出来事に収まつたかに見えたのだったが、この一年後の昭和三十六年一月号（16巻1号）の記事「MERRY GO ROUND／草野心平「あきれたること裁」／安西均「北川さんへご注意」／脇田保「談話」を皮切りに、向こう一年間にわたる再燃の様相を呈することになる。それは、北川冬彦が当該事件を蒸し返したことに端を発したもので、北川の発言を元に関わつた詩人たちの疑心暗鬼と潔白証明がその年の終わりまで続出、北川は、これがために自身が創設に関わり、初代幹事長を務めた「現代詩人会」を同年退会するに及んでいる。

続く記事をあげてみると、投稿文もふくみながらの悶着の様子が伝わってくる。「MERRY GO ROUND / 北川冬彦」「草野心平、安西均二君に答えるの文」(16巻2号 昭36・2)、「MERRY GO ROUND / 草野心平」「いよいよもつてあきれたること哉 北川発言への再度の答え」/ 安西均「理由書一札」/ 村田耕作「詩人の姿に還れ!」(投稿) (16巻3号 昭36・3)、「MERRY GO ROUND / 北川冬彦」「草野心平君へ—無頼の酒徒相手では—/ 投書「臭いものには蓋をするな」山田寂雀 / 「日賞事件について」木下博子」(16巻6号 昭36・5)、「MERRY GO ROUND / 安西均「ぶれい者」」(16巻11号 昭36・9)、「MERRY GO ROUND / 三好豊一郎「ちよつと言」」(16巻13号 昭36・11)。

## 2 藤森安和らの登場

見てきたような年長者たちのくすぶりをよそに登場してきたのが、十代の藤森らである。先の座談会で日氏賞事件によって何もない年だったと切り出した鮎川は、話題にできるのは「ユリイカ」と「現代詩」の新人賞くらいしかないんじゃないですか」と続け、「セクシーな詩」が入選した(編集部)という指

摘に対して、「他にいい詩がないため」、「ナンセンスな文学」、「文学以前のもの」と批評、「詩人も芸能家なみになってきた」といった感想とともに、「選者の責任として、選んだものが評判になるということは必要」であると、その戦略性を述べ、「こつちもちよつと汚いものでも掴むような」感じがあるとする。そして、藤森らの作品が「ビート・ゼネレーション」や「アングリー・ヤング・メン」であるとは思わないが、「ヒヨツとしたらそういうものがでてくる可能性のある共通の地盤みたいなのを、一遍みたくつた」とも明かしている。また、詩人と社会との対立関係において、「あくまで違つた生き方が可能であるという、ビジョンを提出すること」の必要性とあわせて、座談のなかで吉野弘が述べた「肯定的なイメージ」の重要性に同意し、「否定しつ放し」は「日本の進歩主義文学の非常な弱さ」だと明示している。

この座談会をふくめ鮎川の述べるとおり、藤森の詩は賛否取り混ぜ「評判」になった。『詩学』においてももちろん例外外ではなく、同号の小海永二による「詩論批評」は、藤森らの詩は「現実が現実の現象形態にすぎず、時代の皮相を映す」に過ぎないとして、その受賞に「疑問」を呈する。一方、翌号(15巻4号 昭35・3)では、「現代詩の曲がりかど 特集 現実派の

方向」として、藤森と同じく前年に『ユリイカ』新人賞に十五才で当選し「評判」となっている間宮舜二郎の「道」を掲載。特集題の「曲がりかど」、「方向」と皮肉に響き合っているようでもあるが、「長靴をはいて泥道を歩くがいい」と始められる〈道〉を、「俺」は終わりがあることを知りながら〈てくてく〉と歩き、きれいな林の道から乾いた風景へ、そして遭遇する〈前歯の欠けた男〉の言葉を〈理解できなかつた〉と閉じられる詩篇の世界はシュルレアリスティックで虚無的である。新人賞当選作の「現代の快感」におけるグロテスクで湿潤な肉体を描写した世界観とは対照的であり、肩透かしの感さえある。そして、同号巻末には入選作を表題とした藤森の詩集『十五才の異常者』（昭35・3 荒地出版社）の一頁広告が、「現代詩の概念を根底から覆えす新人の出現！」とラディカルなカットで掲載されている。当詩集に関して同年六月号の「詩学図書室」（15巻8号）では、未完成ながらロカビリーのような気迫が感じられるとしつつ「現代というものの断片化」を象徴していると結ぶ。そして翌号（15巻9号 昭35・8）、藤森の詩篇「政治家のためにフラレタ僕―敦子への日記」を掲載、決して行儀が良いとは言えない恋人〈敦子〉と同じくらいに品のない〈総理大臣さま〉であるのに、その〈総理大臣さま〉と〈ボク〉と

が似ているからと言って、〈敦子〉にフラれてしまう不条理を描いている。藤森はここにおいても、先の間宮のようにはおとなしくない。

二月号の「詩論批評」で藤森らの受賞に疑問を呈していた小海は、一月号の同コーナー（15巻12号）で、『現代詩手帖』に掲載された原崎孝の分析を借り、藤森らに対する方法論の欠如とファナティックなイメージの根源を照らすべきだと指摘する。いっぽう藤森は、翌昭和三十六年一月号（16巻1号）の「一九六一年の詩壇にのぞむ」（A Hope for Poetry）において、現実を「空虚な日常の墓」と形容、自分たちを「棺の中で、空虚な日常を意識し、目が覚めた世代」と捉え、求められた「詩壇」への「望み」については、「絶望と倦怠の、痙攣詩人たる、私たち若い世代の書く詩の持つ意味の声」に、「素直に耳を傾けて」ほしいとしている。また、同コーナーの吉田精一「詩壇へ」は、蒲原有明の詩は難解と言われるが自身にとってそうではなく、「すぐれた詩は、難解であるのが、むしろ常態なのかも知れない。底までわかるような作品は、むしろ歌謡とか、民謡とか、その方に近いのだともいえる」、「難解を恐れる必要はない。むしろ難解であれ」と述べたうえで、「詩のソノリテ」（音楽性）への意識喚起をおこなっている。このよう

に、各世代、各人、重要視する観点はさまざまであり、「一九六一年の詩壇」への望みは多角的であるが、そのなかで藤森がみずからの詩作への理解を促している点は、「評判」への応答として注目される。

応答という観点からは、実作品における藤森への応答もなされている。加藤邦彦（註）が紹介するとおり、谷川俊太郎による自作への詩句引用、寺山修司による自編アンソロジーへの詩篇収録、そして、『十五才の異常者』出版翌年に、大江健三郎が発表した話題作「政治少年死す（セヴンティーン 第一部）」（昭36・2『文学界』、「セヴンティーン」『文学界』昭36・1）のなかで、詩篇「あら。かわいらしい顔。―イヤラシイ子タヨ―」を引用していることはよく知られている。さらにこの翌年、今度は藤森から大江に対する応答が、『詩学』掲載詩篇「日常の暗殺者」（17巻5号 昭37・6）にふくまれているようであることも紹介しておきたい。詩篇の世界は、先年の「一九六一年の詩壇にのぞむ」における「空虚な日常」と共鳴しており、「快樂に酔った」（セヴンティーンの少年）の〈炎えた肉体〉と、〈まじめに列車を動かす〉ばかりで〈無関係は男のこと〉と繰り返される〈空虚な男の目〉が、列車に飛びこむ人間を〈ひき殺す時〉に〈炎え〉あがるさまとが対置されている。〈革

命〉、〈社会主義〉、安保闘争を象徴する（一九六〇年六月十五日）がちりばめられ、〈男〉と〈少年〉と世界は次のように交差する。

無関係は男のことなのだ。／列車の自分に／右翼の十七才が乗つていて。／議員の保守派が乗つていて。／進歩派議員を叫ぶ条約反対が乗つていて。／数日後に／日米安保条約が自然成立し／右翼の十七才が／委員長を刺し殺し／近代的なブタ箱で自殺し／セヴンティーンの英雄に消えようと／無関係は男のことなのだ

関口篤はこの前年、「詩壇展望一九六〇年」（16巻3号 昭36・2）における「詩集」の項で、『十五才の異常者』について、「方法的にはむしろ古い」、「草野心平から山本太郎へとたどることのできる日本のフォードビズムのひとつの開花」とする興味深い捉え方をしており、加えて、「彼が詩を書き続けることを前提としてその真の開花は今後のこととみておこう」と結んでいるのが、意味深長かつ予言的で目を引く。週刊誌や新聞にまで取り上げられ、藤森の詩に対するキャッチフレーズの煽り合いの体すら見せていたマスコミの騒擾が、「現代詩の閉鎖的状況」を詩そのもので「打開した」（関根弘「編集ノート」『現代詩』7巻5号 昭35・5）との評価を導きもした

が、それらをつぶさに追った加藤邦彦<sup>註3</sup>が指摘するとおり、藤森の詩は、「マスコミにもてはやされながらも」「現代詩の閉鎖的な壁」を破ることができなかった」のであり、その後詩を書き続けることはなかったのだった。

### 3 二十代、三十代、そして先達たち

前稿<sup>注4</sup>でその登場に触れた大岡信、吉本隆明は存在感をますます発揮、松田幸雄「詩論批評」(16巻2号 昭36・2)では、大岡「戦争前夜のモダンリズム・『新領土』を中心に」、吉本「四季」派との関係(「ユリイカ」同年12月号特集「戦争の前夜」)をとりあげ、辛口の批評をふくみながらそれぞれの特質(大岡の資料博搜、吉本の切り口)を照らしており、現代の詩研究においても看過できないこれら評論の生み出された臨場感を受けとることができる。また、同時期の「詩壇ダイジェスト」(臨時増刊1961年版 詩学年鑑 16巻3号 昭36・2)に掲載されているとおり、吉本は前年六月に「近代文学賞」を受賞するも、同月一五日の安保闘争で逮捕され、釈放が授賞式に間に合ったので「かろうじて」「出席することができた」といった状態で、別の臨場感も放たれている。

吉本よりもひとまわり若い世代、安保闘争の渦のなかから「六〇年代詩人」たちがその名のとおりで登場してくる。渡辺武信による短文「天沢君のこと」とともに掲載された天沢退二郎「さむい空の部屋」(16巻2号 昭36・2)は、次の最終連が象徴するように、彼らの傷みをともなつた透明な浮遊感、それによつて描かれる自他へのレクイエムが特徴的にあらわれている詩篇と言える。

きみは帰らず悪いひだに嘸み下された空／の方へとほはかぎりなくうすく／なつて遂には青ざめた水の／うすい唇のひとときれになつて／吹きとばされるまで／だからいまきみには見えるきみの顔に／突きささり肉を濡らしはじめる  
風のなかの／ほくたちの刃たちが

そして、先達たちへの敬意も並ぶ。先掲の「詩壇の動き／河井醉茗翁の寿賀を祝ぐ会」(15巻1号 昭35・1)をはじめ、西脇順三郎と西條八十が芸術院会員に選ばれたことを受けて、「芸術院新会員記念 西脇順三郎・特集」、「芸術院新会員記念 西条八十・特集」(17巻3号 昭37・3)が生まれ、西脇の詩篇「最終講義」、大岡信「西脇順三郎氏への敬意 西脇順三郎論」、鍵谷幸信「西脇順三郎氏の周囲 西脇先生の食欲・その他」、西条八十作品集、安西均「西条八十氏への敬意 遠くの



ほうからの祝辞」、三井ふたばこ「西条八十氏の周囲 父・西条八十のこと」を掲載、続く号では、「詩壇時評」（無署名）（17巻4号 昭37・4）が次のような状況を照らす。西脇の芸術院会員は「昭和詩の現役の詩人に最初に与えられた荣誉」であり「芸術院は養老院ではなくつた」が、その西脇の全詩集を出そうという本屋が無いのは、「売れそうもないからだ」とする。その一方で、高価な限定豪華版で出された室生犀星と三好達治それぞれの全詩集は「とにかく売れて」おり、「現代詩は引きさかされている」。さらに、「ノーベル文学賞の当て馬」が取り沙汰された折に、「新聞」では「谷崎潤一郎、川端康成、西脇順三郎」が「あちらの考える候補者」としてあげられているのに、「週刊誌」になると西脇が外されて「三島由紀夫、芹沢光治良」に変わるのには、「詩と詩人というものをバカにした日本特有の常識的？判断がそうさせたのだろう」と、憤りを隠さない。ここには、詩と先達詩人をめぐって幾重にも「引きさかれている」ありさまが浮き彫りにされている。豪華版全集が売れているという三好達治については、この翌年、西脇らと同じく「芸術院新会員記念 読売文学賞受賞記念 三好達治近作抄」（18巻3号 昭38・3）が特集される。

しかしながら、室生は昭和三七年、三好も三九年に他界す

る。室生については、「室生犀星追悼」として堀口大学の追悼詩篇「犀星詩人昇天の日に」（17巻5号 昭37・6）を掲載（同号は、先掲の藤森安和「日常の暗殺者」掲載号でもある）、三好については、「三好達治追悼」（19巻5号 昭39・5）として、杉山平一、萩原葉子、国武三雄、安西均が文を寄せている。先に、西脇とは対照的な存在として引き合いに出された両詩人だったが、その追悼号は決して大きな取り上げられ方とは言えない。三好の追悼号における「詩壇時評」（無署名）では、その死をめぐって、「三好達治が萩原朔太郎について語ったように、三好達治について語る詩人が果しているであろうか」という胸のつかえが、「三好達治という詩人の生涯が簡単な新聞記事で終ってしまったこと」とともに述べられ、同号の「編集後記」では、三好と同時期に急逝した佐藤春夫について城左門が、「先生のような文人は、向後、もう新しく生まれることはないだろう」と悼み、嵯峨信之は三好と佐藤の死を、「現代詩のために、秀れた惜しい詩人を失った」、「芸術家の最後の孤独な姿を見る思いがする」と、その「やるせなさ」を吐露している。

先達への敬意を折々表現してきた『詩学』ならではの捉え方である一方、自誌の追悼号においても、もはやそれを十全にあ

らわしきれていない感があり、述べてきたような各世代の交差と交替の様相が見てとれる。

#### 4 伊達得夫の急逝と詩学社の詩書出版

昭和三六年初頭に書肆ユリイカの社主、伊達得夫が急逝した。昭和三〇年に詩誌『ユリイカ』を創刊、多くの詩書を刊行したことで知られる伊達の早世に誌面が揺れる。翌月の「詩壇時評」（16巻2号 昭36・2）では、伊達の来歴が、そして、同号「詩壇時評」では「戦前の第一書房、戦後のユリイカとならべても良いほどの仕事をしている」と評価、さらに翌月の「詩壇時評」（16巻4号 昭36・3）では、「とうとう社は解散、雑誌『ユリイカ』は二月号で終刊」、「伊達の遺言には「ユリイカを残すな！」とあつた由だが、なんとしてもこのままつぶしてしまうのは残念」、「なんとも心細いのは訳詩集の刊行所」、「誰か詩書専門の出版社を新しくつくつてくれる人はいないものか」といった窮状もあからさまとなる。同号ではまた、「伊達得夫追悼」が組まれ、茨木のり子による印象深い追悼詩「本の街にて―伊達得夫氏に―」、那珂太郎「伊達得夫のこと」が並び、どちらもその人となりを独自の視点で伝えて余すところ

がない。那珂は名編集者の面差しを含羞をもって描出し、書肆ユリイカの造本センス、詩誌『ユリイカ』の特集、多くの詩人を自身の余白にたくわえながら育てていったありようが伝わってくる。茨木は伊達の内側外側をみごとな詩句で切り出している。（派手なマフラー 首にまきつけ／十三階段あるという急なはしごを昇り下りした／長髪 痩身 皮肉な伊達さん！）、（黒いベレーは残つても／その下で明滅した贅沢なひとつの精神は消えました）、（聴聞僧というまたの名もお持ちだつたあなた／多くのひとの歎きや秘密 相談ごと／それらは密封された箱のなかで／どんなひしめきかたをしています／どこに電話してみても もうあなたの声はきかれない／憂鬱で やさしく とらえどころのないような声）。のちに詩集『鎮魂歌』（昭40・1 思潮社）に収められる一篇は、温かなユーモアで伊達をくるんで送り出している。

同号「編集後記」の嵯峨信之は「伊達得夫の急逝は痛ましい」と、自身のパートを伊達追悼に割いており、その見開き左頁の巻末広告には、「社主伊達得夫死去のため、本年四月末日限り閉店します。」として、「書肆ユリイカ在庫目録」が掲載されている。

同年一月号（16巻1号）に掲載されている「全国詩誌名簿」

「詩人団体」「主要詩書出版社」を見ると、「全国詩誌」では、誌面三四頁にわたる夥しい数の「同人詩誌」が北海道から沖縄にいたる全国で発行されていることがわかり、「非同人誌」として『詩学』『現代詩』『現代詩手帖』『ユリイカ』が並ぶ。「詩人団体」は、「日本現代詩人会」「日本詩人クラブ」にはじまり、「現代詩の会」「前衛詩人協会」「国鉄詩人連盟」「早稲田詩人クラブ」などをふくみながら、札幌、名寄、盛岡、会津、浦和、横浜、川崎、静岡、名古屋、広島、長野、岡山、福岡、佐賀にわたる詩人会あわせて二〇団体、「主要詩書出版社」は岩波、角川といった大手出版社をふくむ在京の二三社が掲載されている。誌面三四頁を割くほどの全国的な詩誌隆盛に対して、詩書出版社は総合出版を手がける大手を除けば思潮社、昭森社、ユリイカをはじめごくわずかであり、「誰か詩書専門の出版社を新しくつくつてくれる人はいないものか」という先掲の時評子の言とも相俟って、伊達の急逝による書肆ユリイカの消滅が詩人たちに与えた欠落感の大きさが想像される。

こうしたなか、翌昭和三七七年九月号（17巻8号）裏表紙一面に、当誌を発行する詩学社による詩書出版広告が、佐藤憲詩集『鳶色のペンテル』をその第一号として掲載される。「詩学社の詩書第一号が成完了しました。／装幀、造本とも、詩人のセンス

をフルに生かした作品です。／装幀、造本、解説などは、著者の意志を尊重し、それをますますレファインするような方向に、常に努力しています。」と出版の姿勢が示され、「詩学社の詩書出版 あくまでも良心的におつくりします」の文言がそれを囲む。続く「近刊・進行中」として、『谷村博武詩集』『宗昇詩集たまふりの歌』があげられている。翌号（17巻9号 昭37・10）には、「詩学社の詩書出版・良心的に・スマートに」の文言に囲まれて、「新刊『鳶色のペンテル』佐藤憲詩集／近刊『南国の市民』谷村博武詩集／『たまふりのうた』宗昇詩集／続刊『井奥行彦詩集』／沖縄琉大グループの新鋭『清田政信詩集』」と、出版状況の進捗も知られ、加えて、「詩学社の実費精算方式」として、「現在B6判100頁程度で¥60,000／それに、編集雑費の2割をかけて¥72,000／これが標準の費用です」と、具体的な制作費用も告知されるようになる。ちなみに、広告されている新刊近刊の詩集価格は、三五〇円から五〇〇円に設定されている。見てきたような状況において、『詩学』の詩学社が出版をはじめたことは、詩人たちにとって朗報であったろう。この年から同社が廃業する平成一九年までの四五年間で、国立国会図書館所蔵の同社による詩書は二二〇冊ほどが認められる。

## 5 放送詩劇

戦前からの「放送朗読詩」や「ラヂオドラマ」が継承されつつ、昭和二〇年代半ばから活発になった「詩劇」創作がそれに加わり、詩人、演出家、役者、音楽家らの主張が交錯するなか、詩人たちはエリオットの詩劇論で言われる「第三の声」〔第一の声は詩人自らに話しかける声〕、「第二の声は聴衆に話しかける声」、「第三は詩人が韻文でものを言う一人の劇中人物を創造しようとするときの声」(木原孝一「詩劇の可能性について」『悲劇喜劇』昭31・7)による)を目指して難渋する。おそらく詩人たちの内側では、詩句の現出とそれを響かす声とがともに生じているのであり、他者をとおしてそれをあらわすのが「第三の声」となるのだろうが、あらかじめ他者の声を想定して描出される科白とのあいだには、すんなりと跨ぎきれない困難が生じているように見える。そして、昭和三十年代初頭の「詩学」からは、詩劇が、「音韻」や「リズム」といった音楽的要素を通じて「うた」へ連繫されながらも、一方で、「觀念」、「抽象」、「批判」といった思考的要素も求められ、「歌う詩」と「考える詩」の両要素を併せ持つ高度で困難なジャンル

として措定されていたようであることがわかる。これらの点についてはすでに論じた。<sup>注5</sup>ここでは、それに続く「放送詩劇」について見てみたい。

先掲の伊達得夫追悼と同号(16巻4号 昭36・3)に「特集・放送詩劇」が組まれており、作品として川崎洋「川が」、大岡信「宇宙船ユニヴェール号」、評論として遠藤利男「放送詩・放送詩劇私論—マスコミ芸術についての傍白的メモ—」、アンケート「その意図」「その可能性」に寺山修司以下八名が執筆している。

評論の書き手遠藤利男は、この前年からNHKラジオ「放送詩集」のディレクターを務めていた人物である。「放送詩集」という名称を好まないという遠藤は、それを「先人の功績」としながらも、「やがてマンネリとなり、容易に大衆の皮膚感覚を撫で廻す、一夜のムードに墮してしまつた」と分析、「詩」という「メディア」の強い力を「小さなムードの枠に閉込めてしまつた」のだと言う。そして、「放送詩劇」については、「一体、いつ頃出来上つたのか。いつのまにか、言葉が存在し、従つて、その内在が実在するかのような錯覚をもつようになつた」と述べ、「現在までのラジオ・テレビドラマのほとんどは舞台芸術—年老いた日本の自然主義・心理主義演劇の植民地と

その形骸にすぎない」と断言する。そしてその原因を、「マスメディア」としての「放送」批評によって次のような三点に見ている。一点目は「媒介性」であり、それを論理とする機構に必然的に起こるとされる「ビューロクラシー」(官僚制)を支え、支えられることで「すべてを平均化する凶暴な力」が発揮されてしまうこと。二点目は、「制作者たちの主体的弱さ」であり、ビューロクラシーに対抗して「放送と自己の独自性を主張する力をもちえなかつた」こと。三点目は、「受け手との交流が出来ないこと」を「本質的欠陥」とし、「受け手」を「受動者」にし、「送り手」にとつて「漠然と存在する、大衆」にするうえ、「送り手」の側も「機構の論理」においては「単なる受動者」に過ぎず、「マス・コミュニケーションは、そのまゝ、デイス・コミュニケーション」であることが、「現代マスコミの矛盾」、「マスメディアとしての頹廢の兆し」であると指摘する。組織論をふくむ放送制作者としての実感をともなつた分析的な言辞は興味深い。そして、こうした状況にあるメディアのなかで「ラジオ」を「独自の表現体」と捉え、「制作者の主体的意識」をもつて「本質的に捉え直そう」とした要因は、「テレビの発展」とその相対性においてであり、若い世代の舞台芸術に対するコンプレックスの皆無と、「ラジオを独自の思

想表現の場とするエネルギー」に支えられていると、その潮流を伝えている。ラジオとテレビの相対によって、ラジオの独自性があらたに発揮されるようになったという同時代的言表は重要だろう。

実作者の側からは、同号で「アンケート／その意図」に込んでいる寺山修司が「地下室と芽」と題するなかで、遠藤の言辞を裏打ちするように独創的な発想を述べている。

ラジオというマス・メディアの世界では行為と言語が分離していることに意味があるように思われる。ここでは言語は肉体と一応べつの「もの」として扱われる。したがつてラジオ・ドラマの言語はどんなにリアルに演じられても本質的には不具であり、それだけに特殊性をもつている。もし「詩劇」が言語主体のドラマ、ということでもパントマイムの反対の極にあると考えるならばラジオ作品のほとんどは詩劇であると言わざるを得ない。／しかし、最近僕にとつて興味のあるのはこうした言語至上の、いわばシーニュでない言語の城のような詩劇よりも、ドキュメンタリーとしての機能をもつていた言語をモチーフとしたものである。なまなましい一つの現実の中から行為を剝奪し、言語だけのこし取捨して構成してゆく。そしてそれとメカ

ニツクな物質言語を対立させて一つのエネルギーを組成させる。

行為から生み出された言葉を自立させ、メカニツクな言葉と対位させるといふ発想は、肉体と物質という直截的で見慣れた対位からはズラされたところで「何か」が成立する予感をほらんでおり、ラジオにおける視覚の閉鎖に対して、この方法はむしろ視覚の残像を意識させ、ダイナミツクな転位を現出させることになるのではないかと予感させる。

また、同号「詩壇時評」では「放送詩集」について、NHK第二放送で毎週水曜の夜に書き下ろしの詩を五分で朗読、同年に入ってから、清岡卓行、谷川俊太郎、岸田衿子、黒田三郎らの作品が放送されていると伝えている。ところが、以前は実験的なものもあつたのに、これらについては、「なんのことはない。活字で読んでも同じような詩が、ただ声になるだけ。詩のソノラマだ」と批評、もつとアイデアを出すべきだと叱咤している。そして、「放送詩劇」については、「たびたびオミミにかかるが、どれもこれも小味な鯛のブイヤベースみたいに、きれいことが多い」とし、こちらはアイデアも大切だが、それ以上に大切なのは「精神、気魄」であり、「抒情ムード」はいけない、「抒情詩」である、「一本スジのとおつた豪華ケンラン

たる大抒情詩をお聞かせ願いたい」と、その大作化を奨励しており、ここではまた詩劇に対する別の期待が披瀝されている。

さらに、先の遠藤論をとりあげた松田幸雄「詩論批評」（16巻6号 昭36・5）は、遠藤が俳優たちの自然主義的で主情主義的な感情移入の方法が、言語の新しいエネルギーを発見しようとする際の障碍になると指摘したことを受けて、「俳優の演技力の不足やマンネリズム」への批判を加えている。俳優の言い回しについては、詩劇出發当初から問題視されていた点であり、この段階に及んでも根本的な解決にいたっていないことが知られる。

この時期流行の放送詩劇についても、やはり期待は大きく、さまざまな試みや心持ちを見てとることができる、先の藤森安和の登場の折に寄せられた閉塞的な現代詩打開の期待は、詩劇においてもまた同様だったのである。

## 6 特集と「荒地」

一九六〇年代の幕開けとともに、現代詩における転回点の自覚を嵯峨信之と木原孝一が「編集後記」で吐露していたことはすでにふれたが、その感覚は誌面特集に反映されている。藤森

と並んで注目を浴びた間宮舜二郎の作品が掲載されていた特集「現代詩の曲がりかど・現実派の方向」(15巻4号 昭35・3)に続いて翌号、翌々号と同特集はそれぞれ、「社会派の方向」(15巻5号 昭35・4)、「芸術派」(15巻6号 昭35・5)といったように生まれ、『6月増刊号』(15巻7号 昭35・5)では「世界詩論体系」、そして、金時鐘による短文「反逆者からの反逆へ」を付して、「ガリオン(大阪朝鮮詩人集団)特集」(15巻9号 昭35・8)も組まれるようになる。また、詩論への傾注も見られ、「現代詩7人論集」(15巻12号 昭35・11)では、嶋岡辰「詩学不在論」を筆頭に飯島耕一、清岡卓行らが並び、「新現代詩読本・特集1」(16巻9号 昭36・8)の詩論では、多田富雄「メタフィジック詩の展開」など五篇が並ぶ。この翌号には大がかりな特集として「詩壇一〇〇年史」(16巻10号 昭36・9)なるものが生まれ、一八六〇年から一九六〇年までを四期に分けて「概説」と「作品」とで見せ、さらに、「1860年から1960年のあいだに発表されたおもな作品・詩書・詩誌・詩人などを、社会的事件と海外関係から見得るように編集した独自の現代詩発生から今日までの100年間の年表」として作成された「現代詩年表」が付されている。こうしたある種学究的な特集は、那珂太郎、牟礼慶子といった詩人たち一〇人が、

記紀歌謡から近松までを論ずる「日本の詩の発見1」(16巻11号 昭36・9)、地方性の詩、働く女性の詩、農民の詩、ロマंचシズム、都会性の詩といった視角による「日本の詩の発見2」(16巻12号 昭36・10)へとつながる。同号では、三好豊一郎らが「詩人はこう考える・国語問題」について論じている。現代的な切り口として、「詩誌・グループの焦点」(17巻7号 昭37・8)が、「バツテン」、「赤と黒」、「王様の耳」など当代の詩誌一五誌を、作品と論考(「問題提起」「批評」)で取り上げる。続く「シュルレアリスム特集」(17巻8号 昭37・9)は、飯島耕一、上田敏雄、服部伸六らをはじめとする論考に、トリスタン・ツアラら国外のシュルレアリストらの詩篇と北園克衛、左川ちから国内の詩人たちの詩篇、ダリヤやエルンストの絵画を織り交ぜて国外と国内を対照させた「シュルレアリスム年表1916〜1960」をあわせており、本号は独創的で本格的なシュルレアリスム研究文献となっている。「世界現代詩選1960〜1962」(17巻10号 昭37・11)も、詩人たちによる国ごとの「詩壇展望」と詩篇翻訳によって英米独仏に「ソヴェト」「中国」を加えた当代の動向紹介となっている。「プロレタリア詩再検討」(18巻4号 昭38・4)もおこなわれ、中野重治らの詩人論、回想と記録、作品選、年表をそなえている。「新日本詩

人」、「詩人会議」の主張や「列島」批判、大島博光「社会主義リアリズムを進めよう」など同時代への接続をふくみはする

が、壺井繁治らによる回想と記録が物語るように、総体としてプロレタリア詩の相対化、歴史化の相貌が濃い。次号では一転、「具象詩と抽象詩の問題」（18巻5号 昭38・5）が論じられ、高橋新吉が「日本のダダイズム運動」を経験的に論じているのは貴重である。さらに翌号では「現代詩・地方性」（18巻

6号 昭38・6）が生まれ、先にふれた二年前の特集「日本の詩の発見2」とも響く。特集の筆頭に置かれた書簡体評論「故郷の山は僕を熟睡させる」を執筆した斉藤庸一は、草野心平の題字を持つ詩集『ゲンの馬鹿』（昭森社）が、プロレタリア詩の特集を組んだ前々号（18巻4号 昭38・4）の裏表紙広告に大きく掲載されている。「まぎれもなく百姓の子」、「血を三代四代に遡っても、嫁いできた母性はすべて百姓の娘」（後記）という来歴の強調される詩風であることが、プロレタリア詩にも、そして、地方性にも跨がる存在としてあるのだろう。

述べたように、学究的な趣を以前に増して宿しながら組み立てきた特集のながれのなかで、「荒地」の特集も登場する。同年八月号（18巻8号）の「特集・〈荒地〉」では、評論や詩集と並んで掲載された座談会「荒地の遺産」（清岡卓行・黒田三

郎・中村稔・関根弘・嵯峨信之・木原孝一）が目を引く。木原や黒田がしっかりと語っている。

木原「戦争中はモダニズムにげやすかつたわけです。そしてなにかをつくつていれば自己防衛はできた。ぼくらは防衛しながら不満があつたんです。（中略）モダニズムは防空壕だつた。弾が当たらないという感じがあるわけです。完全に美学でしょう。」

木原「囚人」が問題になつたのは、三好が兵隊にもならず、外地へもいかなかつたから三好の内部では詩が継続されていたということです。ぼくは外地へ行つてかえつてきて、なにをしていいかわからなかつた。そのとき「囚人」を書いてもつてきた。三好はサンボリズムの直系みたいな男だから、内地にいて、モダニズムの影響はうすれていった。青山鶏一とか、もつと人生派に近いような詩人たちとつきあつていて、そのなかから「囚人」という詩がでてきた。ぼくらが生きのこつて、最初にかえつてきたとき、そこに杭が立つていたという感じがした。澄んだ詩というようなものよりも、杭のような感じがしたんです。」

黒田「やはり戦争中にいい詩を書けたのは彼だけという印



象が強いですね。」

木原「こつちがこわされている間に、三好はつくつていた、という感じがする。」

黒田「たとえば、硫黄島の詩は硫黄島でしか通用しない、という批判があつたわけです。そういう意味では、戦争体験でしか通用しないというのが仲間うちにある。詩といふもんじやいけない、という考え方があつた。だから、戦争体験を書きつくしたから、役割が終つたというのは、いい方がおかしい、ほくら結局そつちの方にゆがんで詩で、自分の居あわせたところでは書けないわけだけれども、それが普遍的な形をもたないというか、ちがう体験をもつた人には同感してもらえないということですからね。まあ、嗟峨さんがそういう発言をなさつたからいふんですけれども、死の灰の問題があれば、現象的に死の灰の問題にするという態度では詩を書けないわけです。それもいいとおもふんです。すぐ、その場で詩をかける人は、応援歌の必要なきはすぐ書ける人は書いた方がいいとおもいますけれども……。」

関根「ぼくは、センチメンタリズムだと思ふんだな。それがトラジックな要素ばかりを強調した。体質的に反発を感じたというか……。」

黒田「それはわかるな。」

嗟峨「それがなかつたのは黒田君なんかですね。」

清岡「中桐雅夫の生活を対象とした詩は観念的な高さはあるが……黒田さんは異質だとおもつた。」

黒田「ぼくは横において論ずるわけですよ。」

「荒地」における三好豊一郎の位置付けや、詩と体験についての慎重な姿勢、悲劇的要素に対する批評的反応など、「考える詩」の作り手たちであることをあらためて印象づけている。

「荒地」は「戦後詩」を捉える上で検証され続ける存在であり、そのことは『詩学』の初期から変わらぬが、この期においても同様である。右の座談に先立つ松田幸雄「詩論批評」（16巻11号 昭36・9）では、「荒地」をめぐる種々論評を取り上げており、沢村光博「戦後詩の探求」（『湾』11号）からは、「時代の気分が生んだ浮動的な精神を免れていて理性的であつた」ことを汲み取り、新鋭の詩人と評論家による討論「美学者の末路——鮎川信夫と田村隆一」（『現代詩手帖』8月号）については、論者たちの美と倫理、あるいは美学的観点の未消化を指

摘している。「詩人会議 62 危機に立つ詩人の場からメタフオア論にいたるシリアスな発言」(木下常太郎・村野四郎・原崎孝・中川敏・江森国友・嶋岡晨・安西均)(17巻4号 昭37・4)は、影響力のある批評を必要と感じながら、それをなし得ない理由を「荒地」との時代的差異に還元し、かつては戦後意識という強い連帯感や共通性が存在したが、現今においてはそうしたものがないために、インパクトのある批評は生み出せないとする。批評の不発の要因を所与の条件の異なりに求めている論理そのものが、行き詰まりと危機を感じさせる座談である。この一年後に、先の座談「荒地の遺産」をふくむ特集(18巻8号 昭38・8)が生まれ、さらに一年後の匿名批評「SK・ライン 現代詩と伝統の問題」(19巻6号 昭39・6)では、田村隆一を中核に置いたエリオットと「荒地」との比較伝統論が展開されている。戦後詩における「荒地」のインパクトは、やはり強烈である。

ほか特集では、「鎮魂歌」(19巻4号 昭39・4)が生まれ、実在の人物を対象とするものの一方で、谷川俊太郎「詩三篇 静物／追分／木の壁」による世界と〈私〉との異和、ズレ、喪失といった抽象度の高いレクイエム、さらに、独仏米の詩篇が並ぶ。翌々号(19巻6号 昭39・6)の「韓国現代詩」

特集(ガルシア・ロルカと二本立て)は、現代詩人九名の訳詩篇と李沂東「韓国詩壇の現状―詩人と作品―」によって目を引く。李は、北朝鮮の詩篇がよく紹介されるのに対して韓国の詩篇はそうした機会に恵まれず、思想政治と関わらない文学として取り上げたいと述べており、当時の意外な扱われ方が知られる。

## 7 オリピック、そして、詩学

昭和三九年は東京オリピックの年だった。一〇月開幕。『詩学』はその特集を組むでもなく、静かである。オリピックを目前に控えた城左門の「編集後記」(19巻9号 昭39・9)がそれをよく物語っている。

……やつと夏が過ぎた。暑かった。この秋は、オリピックで大変だろうから、邪魔にならないように隅の方に居よう。そつと虫の音でも聞いていよう。

木原孝一の「オリピック日記」(19巻10号 昭39・10)はシニカルである。開会式を「テレビで眺め」たという木原は、新聞に書く約束のオリピック詩のネタ探しのためだと言い、選手団の入場時に「カシラーミギ」の敬礼は誰に向かつてする

のか、「私は旧神宮外苑競技場で、師団動員のときに軍装検査を受けたときのことを思い出した。戦中派はシツツコイ。」(10月10日)と開会式の日を締めくくる。陸上競技一万メートルで「すばらしいこと」と贅ずるのは、セイロンのガルナナンダ選手が無人のトラックを完走したことで、「現代の象徴的ドラマ」、「人間の存在そのもの」と言い、この選手が東京で仏陀の寺院を参詣したただひとりの選手であることを「このことも象徴的。多次元的象徴。」(10月14日)と意味深長に結ぶ。観戦切符の日が雨に見舞われた不運な木原は、フィールド競技も「雨でよくわからない」、「どうしてスケジュールを変えないのだろう。寒いのでだんだんイライラしてくる」。喘息もあるのであわてて帰宅し、開会式同様「テレビ」でバレーボールと水泳を「眺め」た。こちらの方がよほど良く、「オリンピックはテレビ!でということかな」(10月18日)と、テレビびいきが高じている。約束していた「オリンピックの詩」は、黙考三時間のうち、例のガルナナンダ選手で無事完成、引き渡しとなった(10月19日)らしい。

さらに木原は同号の「編集後記」で、オリンピック選手がアマチュアであることにふれ、「その人の職業はその人のアマチュアとしての価値を支えるためのものに過ぎない」と、興味深

い視点を提示し、詩人のほとんどがアマチュアであることに結びつけて次のように言う。「詩がアマチュアによつて書かれているからよいのか、それともアマチュアによつて書かれているからダメなのか、それには断定しがたい」。同後記で嵯峨信之は、オリンピックを「青春の自覚と、その喪失の自覚」、「死に捧げられた生命の讃歌」と形容、ギリシャオリンピックの讃歌を書いた古典抒情詩人ピンダロスの「人間は影が夢見る夢である」を引用し、谷川俊太郎にもその共鳴を見ている。「詩壇時評」(無署名(19巻11号 昭39・11)は、小林秀雄、團伊玖磨、鶴見俊輔らによる閉会後の論評を引き、小林が文学的常套句よりも「選手の口のなかはカラカラだ」と言った解説者の言葉に「異様な感動を受けた」ことへの共感、團による「見えてくるあたりまえのことばかり」叫ぶアナウンスに端を発した、安易な解説頼みの風潮批判への同調、さらに、鶴見による「戦前の国家意識、民族意識と異なるもの」ことを明るく注目したことに同感としつつも、一方で、「ニユーヨーク・タイムズ」のローゼンソールによる日本人分析(前進しながら、突然試練を恐れてあとじさりするのは、敗戦による価値観の崩壊や国家目的の代替を見出せない不安に拠る)を受けて、オリンピックへの期待とお祭り騒ぎはそうした代用品であったのではない

か、とも投げかけている。『詩学』におけるオリンピックの捉え方は、総じてベシミスティックなポーズに墮してはいない。

そのほか、文壇詩壇の動向が生々しく伝えられているものに、このオリンピックと同年、SF小説の隆盛はなほだしく（城左門「編集後記」19巻6号 昭39・6）、探偵小説の『寶石』が解体（木原孝一「同後記」）したこと、安西均「詩壇風俗帖／「ずぼらな奴」（19巻10号 昭39・10）が、主催講演会のオーダーなしに広告を先行して事後承諾をさせる『現代詩』編集部を批判した同号の「編集後記」で、「このほど僚誌『現代詩』が休刊となつた」（木原孝一）と納得の動きを報告、また、三四年に創刊された『現代詩手帖』について、窪田般彌「詩誌月評」（15巻5号 昭35・4）は「週刊誌的要素が多い詩の専門誌『現代詩手帖』と評している。

この期の『詩学』は先述のとおり、特集において学究的色彩を濃くしており、それと連動するように、大学や学会と詩人たちとの連携が見られるようになる。「詩壇ダイジェスト／公開・現代詩講座 日大芸術学部」（『臨時増刊1961年版 詩学年鑑』16巻3号 昭36・2）は、次のような初めての試みについて報告をしている。

日本の大学に現代詩の講座がないのはおかしい、という

声が近年ほうほうで云われてきたが、ようやく、日大芸術学部が現代詩の講座を持つた。といつても暫定的なものだが、とにかくはじめての試みであろう。講師は現代詩人会の協力を得て、つぎのような顔ぶれとなつた。／1 現代詩の生まれるまで（木下常太郎）／2 明治時代の詩（神保光太郎）／3 島崎藤村について（瀬沼茂樹）／4 大正時代の詩（伊藤信吉）／5 萩原朔太郎について（三好達治）／6 昭和時代の詩（戦前）（大岡信）／7 昭和時代の詩（戦後）（黒田三郎）／8 詩とは何か（村野四郎）／9 詩と哲学（藤原定）／10 詩の表現方法（安東次男）／11 日本の詩と外国の詩（西脇順三郎）／12 詩の未来（山本太郎）

また、その前年には、「日本近代文学会・シンポジウム。10月23日秋季大会「現代詩の課題」村野四郎・木原孝一・河村政敏・関良一」（『詩壇の動き』15巻13号 昭35・12）とあるように、日本近代文学会秋季大会に村野四郎、木原孝一がシンポジストとして登壇、これらは画期的な出来事であったにちがいない。「国語国字論議」（村野四郎・木下常太郎・中川敏・江森国友・原崎孝・嶋岡農・安西均）（17巻7号 昭37・8）の議論も同様である。

『詩学』はその名のとおり、「詩学」探究に余念のない詩誌としての性格を、いっそう發揮した。現代詩の状況についても冷静に分析、見てきたような外に開いてゆくさまざまな試みのなかに、こうした学究的姿勢による支えと架橋とを持った。このことは、本誌の重要な特質のひとつとして明示しておきたい。

## 注

- (1) 詳しくは、宮崎真素美「詩誌『詩学』の世界(2)——戦後10年からの展開」(『愛知県立大学説林』70号 令4・3) 参照。
- (2) 「1960年前後の詩壇ジャーナリズムの展開と藤森安和——詩誌『現代詩』を中心に」(『Intelligence』第22号 令4・3)
- (3) 注(2)に同じ。
- (4) 注(1)に同じ。
- (5) 宮崎真素美「『歌う詩』と『考える詩』——詩劇をめぐる声」(『日本文学』令4・10) および注(1)論文参照。

\*本稿は、日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究

(C)「雑誌『詩学』」「現代詩」「ユリイカ」を中心とする昭和30年代詩の研究」および「『現代詩手帖』および思潮社を中心とする1960年代日本現代詩研究」に拠る成果である。